

死線を越えて

宗像郡大島村 河辺 三男

まえがき

日本が戦争に突入し戦地も銃後も勝つまではと、すべての事に国民は軍部に協力しなければならなかった。

兵隊に行く事は当然視され、体に異状のある人や若い女性は、勤労奉仕といって、軍需工場等で働いていたのである。

大島でも一個大隊の砲兵隊が配置され陣地構築されていたので、大人を始め小学生の上級生（当時は国民学校と言っていた）も勤労奉仕といって海岸からバラス運搬等に動員されて、勉強も満足にできていなかったのである。

兵隊に行った家の玄関には「出征軍人の家」、戦死された家には「誉れの家」と札が下げられ、それが国のためと、名誉であったのであった。戦死した者の母は「軍国の母」と、夫が戦死すれば「軍国の妻」と呼ばれ、悲しみの涙も表に出す事も出来なかったのであった。

入隊

昭和18年1月10日当時21才で男一代の名誉と思い、勇躍征途につく。

翌11日福岡市大名小学校で、軍服姿となり星一つの陸軍二等兵となる。

満州第一国境守備隊要員として、寒さに体を慣すため、朝鮮第26部隊に40日くらい在隊後、満州第299部隊に到着した。

ここは国境線であり山岳地帯で、苦しい環境の変化に対しての努力が必要であった。

克く耐えた、国防の第一線の任務に着くための野砲砲手としての日夜訓練に励んだのである。

4月に入り住友隊長命に依り、衛生兵教育のため穆稷陸軍病院で6か月間の教育をうけ、隊付衛生兵となる。

開戦

昭和20年6月、人員兵器弾薬共に質と量を変えた部隊は、独立混成旅団と改編され、大森隊の歩兵砲小隊付衛生兵となったのである。

昭和20年8月8日夜、ソ連軍の照明弾及び敵飛行機が国境を低空で飛来し、9日早朝に日ソ開戦の火ぶたが切って落されたのである。

部隊は直ちに三角陣地に進入せるも旅団長の命に依り9日夜、戦場を離れた。

転進中東寧西方にて有力な敵機甲部隊と遭遇し、我が軍は混乱状態となった。我が歩兵砲小隊は、砲とともに大損害を受け、村松隊長は負傷し、5名を残し他は全員戦死し、息ある者は「苦しい殺して下さい」と叫ぶ初年兵、その様は悲惨でまさに地獄絵巻であった。村松小隊長をコウリヤン畑まで運び、止血後傷の処置と仮包帯を済ませ、初年兵を1名小隊長の番に残し、後で隊長を連れて本隊を追ってこいと命じ、敵戦車の通り過ぎるのを待って3人で本隊を追う

ため走り出したが河に出てしまった。3名で河を渡ろうと話合い、吉武上等兵（京都郡勝山町）藤川上等兵（大牟田市）の順で河を渡り始めたが、水の流れが急で水に流されないように互いに声かけ合いながら、河の中間まで進んだ時、敵機飛来し機銃掃射を受けて藤川は河の中に消えた。藤川が浮いて来たら助けようと待ったが、二度と藤川は姿を見せる事は出来なかった。その頃吉武は向岸にたどり着いていたが、ここで吉武と別れ元の河岸へ引返したので、これで我が小隊の生残りが散り散りとなったのである。

一人で歩いていると運良く大隊のトラックが来て、「敵の戦車が迫ってくる早く車に乗れ」とのことで、飛び乗りホッとした気分になった。

前方の坂道に兵が30人位歩いていた。車内から「敵戦車が来る早く車に乗れ」と言うと兵が一斉に車に乗ろうとする。その時、敵戦闘機飛来し兵は散開した。

我々3名は1本の木の下に伏せていたところ、敵機の機銃掃射をうけ、真中の工兵隊の初年兵が後頭部から額、両手首を貫通され戦死したのである。

寺前衛生兵（和歌山県下津町）と二人で穴を掘り、木の葉をかぶせ埋葬し階級氏名を記入す。衛生兵だから最後尾を歩く。弱り切った兵を助けながらの行軍であった。

夕方頃三三五五の兵も山岳地に入り、小休止できるかなと思っている時、連絡兵が来て「敵の戦車の機動部隊が近付いている、残存兵力で前進を阻止せよ」との大森隊長からの命令であった。

残存兵は皆疲れ切った落伍者が多かった。集った兵は40名位だったが長が准尉だった。准尉は「今から敵戦車に肉弾攻撃を敢行する。爆雷を持っていない者は手榴弾をもって敵戦車に飛び込め」との命令であった。

今から最後の水盃をするが軍装は捨て、身軽になれと言われた。

水盃が終ると不思議なものである。一死報国の念に燃え、何の不安もなく敵戦車群を待つばかりだったのである。

しばらくすると伝令が来て、「敵戦車は迂回してこの道路は通らぬため、急ぎ本隊に合流せよ。」とのことに40名は本隊に向って歩き出すも、先程の緊張感がとけると眠くなってくるのであった。本隊に合流し隊は山岳地を進むので、敵と遭遇する事なく後退が出来ていたのである。

8月23日昼頃第128師団長より連絡将校来たり。

停戦の大命である。戦陣訓に依り教育されし我は生きて虜囚の恥を知るより、自決を考えて手榴弾の安全ピンを抜くため、ピンを口にくわえたその時であった。大森隊長から「兵に告ぐ、天皇の命に依り全員祖国日本に無事に帰るようにとの御言葉だ、命を粗末にするな」と言われた。

国防の第一線で若き命を祖国のためにと燃し続け、勝つことを信じて3年間、風雪に耐えた我は空しく虚脱し、時の流れに任せねばならなかったのである。

兵舎に残して来たあの母の写真。まぶたを閉じ静かに何千里離れた故里を偲べば、万感胸に迫り、涙に咽びその場に座り込んでしまったのである。

翌24日夕方前、大城敵で武装解除され、終戦を迎えたのである。

無敵精鋭と謳われた関東軍の将兵も今は敗残の兵と化し、屈辱に耐え難い心をじっと耐えてソ連軍の指示にしたがわなければならなかったのであった。

シベリアへ連行

ソ連は日本軍の降伏後60万の兵をソ連国内に輸送連行したのである。「もうすぐ東京に帰れる」と言うソ連軍を信じ、喜び、皆帰国を楽しみ、待ち続けたのである。

まさかシベリアの酷寒地で強制労働3年に及ぶ捕虜生活等は、夢にも思っていなかったのである。

拘留中の死亡者数5万5千の人が酷寒の地に永葬され、無念の想いで眠っているのである。

紙面の都合で書き足りない事は多々ありますが、言ってみれば私の青春を奪いとった戦争でした。